

ポンペの臨床検査学と臨床講義の原典は 科学的医学雑誌 *Kliniek* である

相川 忠臣

長崎大学

『朋氏吉利仁幾（クリニック）備忘録』は順天堂大学医学部医史学教室の山崎佐文庫にある。前半は日本人症例であるが、後半のホヘー（ポンペ）幾里仁幾はオランダ人の臨床症例であり、その末尾に臨床検査学の講義がある。日本初の近代臨床検査学の伝習であるので、相川忠臣、酒井シヅ著「ポンペ・ファン・メールデルフォールトの近代臨床検査学伝習」日本検査血液学会雑誌 7: 229-240p (2006) で原文を紹介した。ポンペが1862年内科臨床講義を終わるにあたり面目を一新しつつあった近代臨床検査学を追加すべきと強く感じていたことが序文「今茲に顕微鏡及舎密（化学）の驗査を細論するは如此時に当て、治方に尤も緊要なる者なり、是等の事件を以て、古方を去り新説に著き事を肝要とすべし」からうかがえる。「分泌排泄中に顯わるる有無兩機分を舎密術及び顕微鏡を以て之を驗査し病徴を説（く）」という題で始まり、有機無機兩成分18のそれぞれに試薬、試薬驗査、顕微鏡驗査、驗證、病徴が簡潔に述べられている。その原典を探し続けていた所、ハルメン・ボイケルスの論文 *De wisseling der stof: De fysiologische scheikunde in Nederland tussen 1840 en 1870* (Symposium „Kracht en stof”, te Nijmegen op 1985) の引用文献に C. Gobée, „Tabel, bevattende eenige organische en anorganische zelfstandig-heden, welke in de se-en excretiën voorkomen, derzelver scheikundige en microscopische onderkenning, benevens toepassing op ziektekunde”, *Kliniek; Tijdschrift voor wetenschappelijke Geneeskunde* 『クリニック：科学的医学雑誌』（*Kliniek* と略）1 (1844) 105-131. とあった。この蘭文表題の和訳が上記の題に一致するのに気づき、原典か否か調べると、18の有機無機兩成分それぞれの試薬、試薬驗査、顕微鏡驗査、驗證、病徴が表 Tabel に纏められていた。成分の和訳、蘭語名のカタカナと原典の蘭語を併記すると、1. 尿酸、アシテウムリキウム、ヒスシュール：Acidum Uricum (Piszuur)。2. 蛋白。アルビュメン、エイウィット：Albumen (Eiwit)。3. 安没尼亞幾：Ammoniac。4. 尿無形澱渣、アモルベシンクセル・インデュリーネ：Amorphe bezinksels in de urine。5. 脂肪球（下線訳不適、穀養成分）、アミリウムホルレン：Amylumbollen。6. ヒリフイーネ：Biliphaeine。7. 血液、ブルード：Bloed。8. 血圈（血球）、ブルーウトセルレン：Bloedcellen。9. 膿圈、エッテルセルレン：Ettercellen。等とよく一致し、原典に間違いない。さらにポンペの臨床講義のオランダ人の12臨床症例も *Kliniek* の一卷（1844）と二巻（1846）からの引用であった。ホヘー幾里仁幾は1. 内臓痛治験、2. 善飢病、3. ベリフト病（水腫の一種）に沃顔を用る治験、4. 慢性下利治験、5. 腹臓第扶斯治験、6. 肺焮衝重症治験、等であり、病理解剖の所見がある症例もある。各症例で血液、尿、便、膿液、喀痰等の化学的検査と顕微鏡所見が活用されている。1843年にドイツのF. Simonが『生理化学、病理化学と顕微鏡検査の臨床医学応用雑誌』を発刊した事に触発されてC. Gobéeがユトレヒトで *Kliniek* を1844年から1849年まで4巻を出版した。ポンペを教えた生理学者F.C. Dondersと蛋白の概念を提唱した化学者G.J. Mulderらが活躍したユトレヒトは、科学に立脚する近代医学発展の中心の一つであった。ポンペはその息吹を日本に伝えた。